

武士道精神は今



金沢二水高校関西同窓会 会長

中川 宗之

(昭和30年卒・7期)

昭和20年7月、金沢市郊外の母の実家に疎開していた頃のお話です。

もう間もなく夏休みだ。わくわくした足取りで、疎開先の小学校から、帰途を急いでいました。村の入口近くの農道で、悪童ども5人が、私の帰りを待ち受け、取り囲んだのです。何かかと思っていたら、一番背の高いやつが「お前は生意気だ」という。私は、その意味が良く理解できません。恐る恐る小さな声で、震えながら「私のどこが生意気ですか」と聞くと「お前の学生帽が生意気だ」というのです。

昭和20年頃、金沢市内の小学校では夏期になると、学帽に白い被いを被せて、登校していました、ごく普通の小学校です。しかし私の説明では、悪童どもは納得してくれません。いきなり私の学帽を取り上げて、近くを流れていた小川に、投げ込んだのです。勿論学帽を拾いに行きたかったのは、やまやまでしたが、あえて無視、胸の内ですくすく帰宅しました。

多分顔色も良くなかったのでしょう。祖母は「何かあった」と心配そうに、聞いてくれたのですが、私は「いや別に」と応えて何事もなかったように振る舞い、昼食を終え、いつものように昼寝をしました。ふと目が覚めたとき、悔しい何としても仕返しをしたい。……どうしたものか。叔父が出征前まで使っていた竹刀が二階にあったことを思いだし、二階から静かに静かに一階に下り、外に出ようと

たとき「ぼう」と祖母の大きい声が響いた。私はいつも自分のことを「僕といていたので、祖母は親しみを込め、「ぼう」「ぼう」と呼んでくれました。「そんなものを持ってどこへ行く」シマッタと思ったが、もうオソイ。

理由は話したくなかったが、根掘り葉掘り、執拗に質問されて、すべて事情を話した。「喧嘩に行くのなら、素手でやりなさい」竹刀は絶対に使ってはならない。竹刀は竹で出来ていても、刀は刀、武士の魂が宿っているもの。喧嘩に使うことは許さない。と厳しい表情の祖母……思わず涙がぼたぼたと土間に落ちた。竹刀が無ければ、とてもあの悪童どもに勝てそうもない。諦めるしかない。武士道精神、当時小学3年の私にそんな言葉は勿論知らなかったが、祖母は孫の私に対し武士としての心得を肌で教えてくれたように思う。新渡戸稲造の武士道精神によれば、

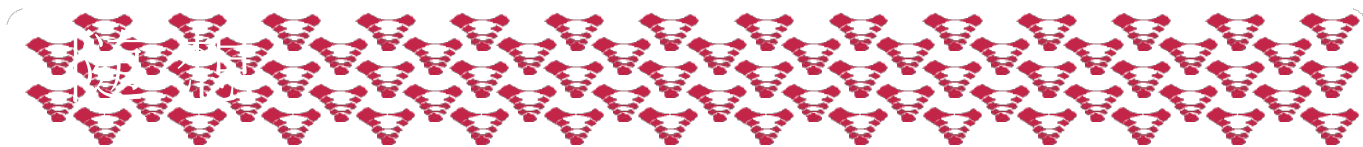
- 1 無差別な刀の使用を許さない。
- 2 適正な刀の使用は許されるが、不正不当な使用をしてはいけない。
- 3 武士として卑劣な行動、曲がった振る舞いをしてはいけない。

と諫めている。武人の究極の思想は、平和主義であると説いている。

学生帽の一件は現在も良くある一種のいじめであろう。終戦時、我々と同年代の方々いろいろな形で、いじめに遭ったようである。戦争、疎開、終戦、食糧難、物不足、もう二度と味わいたくない苦い思い出である。

現在の日本はモノはあふれているが、大切な心が滅びてしまっている。

利益の追求には、手段を選ばない経営者達、倫理観を失ってしまった社会……。我国は、かつては武士道精神というすばらしい価値判断を持ち、その座標軸をしっかりと見つめていたことを忘れてはならない。



生きがい探しは感動探し！

13期 川端 光昭

突然ですが、私は目下「パワー」に夢中です。スポーツジムでの「パワートレーニング」とパソコンの「パワーポイント」です。前者については、今のところその効果に見るべきものがないので、今回は「パワーポイント」

について書いてみます。ご存じの方も多いと思いますが、これはプレゼンテーション（略して、プレゼン）のためのパソコンソフトのことです。プレゼンテーションという言葉は最近日本でもある程度定着しつつありますが、それはパソコンでビジュアルな資料を作って人前で発表することの意味です。デジカメ写真も多用します。言い換えれば、おおよそ大人向け現代版紙芝居といったところですか。実際には、パソコンからプロジェクターを通してスクリーンに映し出すわけです。ですから、このソフトは会社関係では販売代理店への営業方針の説明、国際会議では論文の発表などに多用されています。

私がこのソフトに夢中になったキッカケは、先日友人が作ったプレゼン「イギリス紀行—ネッシーを求めて」を見て感動したからです。仕事を離れた遊び・趣味の世界で、プレゼンを通じて人と交流する点が気に入りました。常々感動探しをしている私にとっては何故か久々の感動でした。そして、即座に「アア、自分もひとに感動を与えたい！」とプレゼン作りを決心した次第。

題材は、今年6月に参加したツアー旅行から「バタヤんのヨーロッパアルプス旅日記—花を訪ねて」と決定。



ブームス大好き！

18期 河本 富子

クリスマスシーズンを北ドイツのハンブルグにいる娘夫婦のアパートで過ごした時のこと。「2年もドイツに住んでいるのに、私達、首都ベルリンには行ったことがないよね」と喋っているのを何気なく聞いて、じゃあ、3人でベルリンまで小旅行しよう誘った。「ベルリンといえばベルリン・フィルの本拠地。もし今夜コンサートがあるんだったら、思い切って行ってみようか」。列車に乗り込んで直ぐに、突飛な話題になってしまった。「あのベルリン・フィルを聴くのに、こんないい加減な計画を立てるなんてね。これで本当にコンサートに行けたら素敵だねえ」とか何とか、屈託のない話題で気分は盛り上がり、冬枯れの野原や森、小さな駅の様子など楽しみながらベルリン駅に着いた。案内所でチラシを貰うと、ベルリン・フィルの当日のプログラムが紹介されていてびっくり。運の良さを無邪気に喜んだものの、ホテルに来るなり娘は熱があると訴えた。取りやめにしようかと相談したけれど、結局私一人がコンサートを聴いて、娘の看病とフィルハーモニーまでの道案内は娘婿が引き受ける、そんな具合に落ち着いた。

ホテルを出てから路面電車に乗り、それから凍てつく冬の夜道をかなり歩いた。何度も道を尋ねたり、方向違いの道を行ったりしたので、目指す建物に着いた時には開演間際になっていた。ところが入り口で、『フィルハーモニーは隣のホールですよ。ここは室内楽ホールです。今夜はパバロッチィが歌いますが、どうなさいますか?』と言われて面食らった。ええっ?あの有名な、世界3大テノールのパバロッチィが今夜出演するんですか?チケットあるんですか?では、そっちでも良いです、と間の抜けた返答をしてから、ハッとした。そうだ、ベルリン・フィルだった。ここは初志貫徹しなければ、『オーケストラは始まっているかも知れませんが、行くだけいっ

それからが大変でした。「パワーポイント」の解説書の購入から始めて、中古ノート型パソコン探し/新品との比較、ソフト「パワーポイント」の購入/テクニック習得。それから写真収集、スライド/ナレーションの作成。スライド作成に際しては、このソフトの多種多様なテクニックを試みるにつけ驚きと感動の連続でした。結局、なんのことはない「他人ではなく、自分に感動を与えた」といったところです。現在の心境は、「生きがい探しは、感動探し!感動探しは、パワーポイントで!」

てみたら』。あせった私達は、その声とパバロッチィを跡に、隣といっても距離がありそうなフィルハーモニーに向かって一目散に駆け出した。

息を切らせてロビーに飛び込んだら、もう殆ど誰もいなくて、通路で腕時計を気にしながら立っているスタッフが見えた。私のチケットを買って戻った若い婿が、「僕がお客だと勘違いしたみたい。このチケットは学生用だ。でもお母さん、大丈夫だから、このチケットを見せて中に入れて」と、無責任なことを言って、あっけにとられている私を残してさっさと帰ってしまった。覚悟を決めて、その超安値のチケットを手にドアへ向かった。ホールに面したクローク(コート預かり所)も急いで通り過ぎた。ドキドキしながら係にチケットを見せると、意外にもすんなり通してくれて拍子抜けだった。

ドアを開けた途端、それまで見知ったホールとはまるで違った光景が目に見え込んできた。オーケストラの並んだステージを取り囲む客席は、勾配のきつい棚田みたいに上の方まで続き、観客の顔や煌びやかな服装の一つ一つがモザイクのタイルみたい。自分の席が最前列で中央付近だと分かった途端に、その場を逃げ出したくなった。会場全体がシーンとして、みんなが指揮者の登場を待っている。まさかこんな場面に出くわすとは。東洋人だから目立つのに。コートも着たままなのに。情けない気持ちでドアから席まで歩いて腰掛け。予想通り、席周辺の人ばかりか目の前のバイオリニスト達からも、冷やかな視線を浴びせられた。緊張と恥ずかしさで汗びっしょりになった私は、祈る思いで席に身をすずめた。

ステージの袖に姿を見せた指揮のズービン・メータを満場の拍手が迎えた。タクトが揺れて曲が流れ出してから、音楽に寄り添う心と耳だけ残って、身体の方は消えてしまいそうだった。魂を揺さぶられる響きだと思った。目に涙まで滲んできた。無我夢中で聴き入った。約束どおり迎えに来た婿に、どうだったと聞かれて、言葉に詰まる。あのような音色、響き…何に例えれば良いのだろう。どう表現すれば分かってもらえるのだろうか。娘にも同じ事を聞かれて、こう答えた。「コンサートで分かったことはね、ブームス大好きってこと!」それが精一杯の感想だ

